

気候変動とは、二酸化炭素などの温室効果ガス（GHG）の増加により、地球の気温が高まる地球温暖化や降雨量の増減など、気候の状態が変化し、自然や生活環境に各種の悪影響が生じる現象である。日本では、二十世紀中に平均気温が約一度上昇している。気候変動は農林業にも大きな影響を与える。気候変動に対応できない可能性が指摘されている地域もあり、また、重要なエネルギー源としての水資源やバイオマス（生物エネルギー）にも悪影響が予想されている。凍土層の融解や降雨量の増大によるインフラへの影響も懸念される。また、標高の低い島国、低地などでは居住が困難になり、環境難民が発生するおそれがある。気候変動を緩和する対策としては、各種の温室効果ガスの排出削減（省エネルギーやフロン削減など）、温室効果ガスを吸収する森林の保護や植林、二酸化炭素の回収・貯蔵などがある。さらに、気候変動が進んでも被害が少ないようにする適応策（乾燥や高温に耐える作物種の開発や、利水施設の整備など）の準備も必要である。二〇二一年八月、気候変動適応計画の骨子案は、増加する洪水や土砂崩れなどの災害を避けるために、危険な地域の土地利用を規制する方針を盛り込んだ。